

令和5年度 第2回埼玉県子供読書活動推進会議 議事録

日時：令和6年3月6日（水）13時00分～14時55分

場所：対面（埼玉県庁第二庁舎4階教育委員会室）およびZOOMによるオンライン開催

出席委員：石川委員長、菊地委員、金田委員、古川委員、三國委員、恩田委員、田中委員、
小佐野委員、石井委員、須田委員、今井委員 11名

欠席委員：今井副委員長（代理出席：神原司書主幹）、内田委員

【議事概要】

協議 埼玉県子供読書活動推進計画（第五次）案について、委員より下記の意見があった。

1. 計画案についての質疑応答

- P5以降の全体の表記について、「子供」「子ども」が混在している。国計画と同様に「子ども」の表記でもいいのではないか。また、他県の表記はどうか。

事務局回答

平成24年度より、埼玉県では公文書に用いる漢字は、常用漢字表によるものとしている。他県については、それぞれの表記となっている。

- P7の注釈1はどこにかかるものか。

委員長回答

P7の1～2行目に記載の「1か月に1冊も本を読まない児童生徒の割合」に係るものである。

- P7～11の達成状況について、令和4年度と令和5年度が混在しているのはなぜか。

事務局回答

現時点での最新値である。

- P26指標③について、「生徒貸出利用率」はどのように算出するものか。

事務局回答

埼玉県内の県立及び市立高等学校生徒を対象とし、「1年間に学校図書館で本を借りたことがあるか」という質問に対し、「ある」と回答した生徒の割合である。

なお、算定基礎は「学校図書館基本調査」によるものであり、例年調査しているものである。

- P26指標④について、「優れた取組」とあるが、どのような定義となるか。また、事例の収集はどのような方法を検討しているか、現時点で考えを聞きたい。

事務局回答

「優れた取組」については、下記を検討している。

- ・読書活動の主体が参考としうるもの
- ・基本方針や4つの取組の視点を踏まえたもの

収集方法については、下記を検討している

- ・事務局を中心に、関係課と協力しながら情報収集を行う
- ・埼玉県子供読書活動推進会議の委員の皆様にもご協力をいただく可能性もある

2. 委員からの意見

<第1章～第3章>

【石川委員長】

- ・本と人をつなぐ、本に付加価値をつけていく図書館としての役割は重要である。
- ・図書館は館ではなく、社会を構成するシステムの1つであり、関係性やネットワークを形成するものである。
- ・本を取り巻く人と人との関係性が第五次計画の施策に反映していくとよいのではないか。
- ・大人が能動的となって、読書環境の整備を進め、働きかけていくことが求められている。
- ・宮崎県の都城図書館を訪問した際、移動図書館車に小学生が手提げ袋をもって利用しており、日常生活の中に読書環境が埋め込まれていると感じた。ただ本を読むだけではなく、「未来の都城（の市民）を育てる」という理念の下、読書環境の整備に努めていることを知った。
- ・本を媒介とした人と人との関係性は、子供だけでなく大人にとっても重要である。
- ・子供に推薦したい本をどのように共有していくのか、という点も第五次計画に含められればよいのではないか。
- ・読書概念は、漫画や図鑑、新聞も含めると活字メディアの広がりを鑑み、第四次計画のままでよいのか、と思うところもある。
- ・文化芸術政策、二次創作や私小説などの文化の発信や創造と読書活動は密接にかかわっている。創作・言語活動にも目配せしてもいいのではないか。
- ・読書概念や定義について、漫画や媒体の差というのも考慮すべきではないか。

【菊地委員】

- ・第四次計画期間中は、コロナの影響を受け、家庭教育アドバイザーの活動が制限された。
- ・前回の会議の中で、本と子供をつなぐ「人」の役割や存在が大きい、という話があったことを受けて三郷市図書館を訪問したところ、非常に感銘を受けた。
- ・三郷市図書館では、小・中学生向けなどの各年代向けの本を紹介するパンフレットが設置されており、本と子供たちをつなぐためには仲介する人の役割が大きいと感じた。

【金田委員】

- ・紙の本の市場は年々厳しさを増しているが、漫画の市場も厳しい状況である。

- ・3年前から漫画コンクールを実施し、多くの自治体からも支援をいただいている。12,000通の応募のうち、ほとんどが中学生であり、小学生低学年は200名程度。
- ・学校図書館に漫画を加えている学校もある一方で、朝読に漫画を入れていいのか、という議論もある。
- ・小学生が漫画を手にするきっかけは、約6～7割が書店、約2割が家族、図書館は10%程度。漫画アプリをきっかけとする小学生は1%程度だが、高校生になると14%と一気に増える。
- ・出版業界全体としては、活字文化を支えるうえでも、漫画も読書活動の1つに加えていただきたい。
- ・文部科学省の令和4年の調査では、21歳を対象に月に1冊も本を読まない人の割合を調査したところ、紙媒体が62%、電子媒体が78%だった。

【古川委員】

- ・施策1について、新型コロナウイルスの影響を感じるとともに、それを課題に明記している点がよい。
- ・乳幼児からの読書に親しむ取組は重要であり、公立図書館で読み聞かせ等の読書活動を進めることで成果として出てくるのではないかと思う。なんとしても向上させていきたい。
- ・施策5は100%に向けて進んでおり、実現できるのではないか。
- ・施策3ならびに施策4について、課題に「停滞」との記載があるが、コロナ禍における実践があったことや現場の工夫などについて表現されるといいのではないか。
- ・施策5についても、子供の読書活動関係者の励みになるような書きぶりに変更すべきではないか。

【三國委員】

- ・三郷市（図書館）では、リーフレットや学校でのブックトーク、読み聞かせボランティア等の育成、学校司書の配備などの取組を続けてきた。（菊地委員の発言を受けて）長年地道にやってきた活動の成果だと思われる。

【恩田委員】

- ・小学生低学年が自宅で本を読む際には、保護者も一緒に読むことや、読書の時間を作ることを考える必要がある。
- ・図書館以外の身近なところ（公民館やコミュニティセンターなど）にも手軽に本のリーフレット等の情報があると、図書館へ行くきっかけが地域の中で作れるのではないか。

【田中委員】

- ・ 幼児教育のときから本に親しむ環境づくりが重要である。
- ・ 国計画の「不読率の低減」を受けて、図書館に行く機会、あるいは図書館から幼稚園や学校に来てもらうために、幼稚園から取り組む必要があると感じている。
- ・ また、毎日の読み聞かせ等を通じて幼稚園から(子供に)働きかけることが重要である。
- ・ 子供の豊かな心の育成や、子供が本に親しむ機会を支援したいという思いから、地域の民間企業から幼稚園へ本の寄贈を受けることがある。
- ・ 地域企業の思いも受けて、読み聞かせを行い、幼稚園を経営していくことが重要であるため、地域との連携や働きかけを幼稚園では実施していきたい。
- ・ また、コミュニティスクールとしても、企業と学校をつないでいく取組を実施していく。

【小佐野委員】

- ・ 病弱の学校に所属していた時に、子供たちは学校図書館が所蔵する漫画をよく見ていた。そのため、諸調査から漫画が除外されていることを残念に思う。

<第4章～第5章>

【石川委員長】

- ・ 視点2について、多様な子供たちに対しては多様な資料を、という視点がある。本に対する障壁をなくすため、「優しい資料」をどう作っていくか。
- ・ 視点3について、『子供が主体的となって参加する事例』とあるが、参加することについては「自主的」という表現が適切ではないか。「主体性」については、イベント等の企画から参加する、などの表現に精査が必要ではないか。
- ・ 視点4について、書店との連携が記載ないことが気になる。八戸市では市が書店を運営している事例があり、読書推進だけでなく文化振興を図るなど非常に有機的なつながりとなっていた。独立系書店とのつながりを含む記述があってもいいのではないか。
※参考八戸ブックセンター (<https://8book.jp/>)
- ・ 全体的に「～の必要があります」という表現が多く感じる。子供や担い手を支援していくような視点で表現できないか。
- ・ 取組2に記載の取組事例「ふれあいノート」は素晴らしい資料である。県立図書館の司書が選定し周知していくことで、「どのような絵本を読めばいいのか」という要望に応えていく、非常に重要な取組だと思われる。
- ・ 取組13について、読書活動の担い手も多様となっているので、そこにも目配せを。
- ・ 取組14について、子供たちの発達段階に応じた連続性を意識した取組を行う必要があり、そのためには学校種を超えた横のつながりを踏まえた記載があってもいいのではないか。
- ・ 「埼玉県の県立高校司書が選ぶイチオシ本」のような、様々な関係者が協力した活動や

イベントも施策のポイントの1つになるのではないかな。

- ・施策例について、取組事例の記載がないものがある。具体的な事例がそれぞれにあると今後の展開につながるのではないかな。

- ・指標④について、できるだけ地域でも参考となるような面白い事例が収集できるといいのではないかな。県内自治体数と同じく、63自治体の事例を挙げるのもいいのではないかな。

- ・読書の範囲について、活字やことば、文字、文学や創作活動と読書がどのようなつながりがあるかを考えることは課題の一つである。また、これらを考えることは、リテラシーを学び、社会に参画することにつながると思われる。

- ・子供がいかに子供読書活動に自主的、あるいは主体的に参画できるかは大きな課題である。公共図書館の中で図書委員のような活動をするなど、大人だけでなく子供同士で積極的な読書環境の形成ができないかな。

【今井副委員長（代理）】

- ・基本方針「不読率の低減」における「読書が子供たちに与える影響」について、抽象的に感じる。

- ・勉強は努力の結果が出るものであるが、読書活動は「なんとなく」「イメージとして」いいものであるという認知だと思われるため、保護者が子供の読書活動を支えるための動機づけが重要である。

【菊地委員】

- ・取組1について、家庭教育アドバイザーには「自分たちからPRして活動の場を広げること」を常日頃から伝えている。

- ・ホームページに研修事例の掲載や県立久喜図書館の子ども読書支援サービスのウェブページともリンクさせているので、今後も活用させていただきたい。

【金田委員】

- ・ネット上での本の個人同士の売買は、そこまでまだ普及していないイメージである。一方で、シェアボックスの取組は徐々に進んでおり、神保町でも2件目ができた。しかし、著作権者への還元はない。

- ・学校図書館の整備状況について、各市町村において学校図書館に関する予算等を有効活用できるような支援を県ができるといいのではないかな。

【古川委員】

- ・「埼玉県の県立高校司書が選ぶイチオシ本」を例年楽しみにしている。これは地域の書店とも連動しているほか、公立図書館でも取組を行われている。また、YouTubeでも配信を行っている。これらは施策4（1）連携・協力の推進に当たるのではないかな。

- ・三芳町では、小学校1年生から中学校3年生までの学年ごとにおすすめ本を紹介するブックリストを配布している。これは町内の学校図書館司書8名と中央図書館司書とが協力して、毎年作成している。
- ・協働や協創など、連携した取り組みが今後はより重要になるのではないかと。

【三國委員】

- ・施策1～5について、内容が具体的、かつ取組も実行可能な内容であると感じた。第四次計画は目標と取組がセットとなっていたために、数値化しやすいものを施策化してしまっていたように感じる。
- ・次期計画ではあえて施策と指標を切り離したことで、施策が実行しやすく、かつ分かりやすいものになったと思う。
- ・特に施策4については、市町村や学校、図書館等に対し、人材育成等を行っていくと言及した点に好感を持った。
- ・不読率等の諸調査に埼玉県だけ漫画を含めることは難しい。現段階では、基本的には漫画や教科書等を除いた統計でよいのではないかと。

【恩田委員】

- ・取組13について、取組名を「幼稚園教員、保育士、児童館職員『等』への研修」として、放課後児童クラブや地域の子供教室、福祉団体等を幅広く含むものとしてはどうか。
- ・取組の実績などの情報収集する場や媒体があると、現場としては好ましい。

【田中委員】

- ・視点1について、子供たちの多様性は重要な視点であり、合理的配慮をした上での読書活動を推進していきたいと日々考えている。活字だけにこだわらず、漫画や絵本なども含め、多様な子供たちに配慮して子供の発達支援につながるような計画となってほしい。
- ・取組12について、一文だけでなく事例の記載があると参考になる。選書や読み方の学び方について、園ではわからないところも多いため、実践の記載があるといい。

【内田委員（代読）】

- ・第5次埼玉県子供読書活動推進計画では、子供たちが本と触れ合う機会を増やしていくような取組が多く載せられていてよいと思う。
- ・子供たちが本と触れ合う機会は、家庭や学校、地域の公共図書館や学校図書館、教科書の学習の発展的な活動等、様々な場面があると思う。コロナ禍では、学校図書館の利用制限があった時期もあった。
- ・改めて、この第五次推進計画に基づき、読書活動が推進されることを期待する。

【石井委員】

- ・取組14について、小中高の縦の連携を推進できないか。発達段階に応じた指導を情報共有するなど、教職員の研修を充実させることで、高校生に読書の大切さを伝えられるのではないか。
- ・漫画について、本校の朝読では禁止している。地域書店は町の文化の一つであり、コミュニティの核であると思うため、漫画をきっかけにすることをカウントしてもいいのではないか。

【須田委員】

- ・全体目標について、電子書籍は入ったが漫画は含まないことを確認した。
- ・大人が漫画を読むことは、今や世界でも当然となったことから、日本の漫画の質が向上していることも考慮していいのではないか。
- ・学校図書館の利用率を上げることについて、本校では図書委員を活用している。図書館を使いたくなるような努力が必要ではないか。
- ・居心地のいい学校図書館を目指しているが、図書館の閉館が早い、という生徒からの意見があった。司書の勤務時間の関係もあるため、難しいところである。
- ・本校生徒がボランティア活動により子ども食堂を訪問している。そこに読書の機会を提供することは大きな刺激になるのではないか。